

先日、新宿食支援研究会ワーキンググループ（以下WG）であるSKTS（最期まで口から食べるを支える：以下SKTS）勉強会が開催されました。このWGは、これまでに「癌ターミナルの方」や「認知症の方」のSKTSについて、そして、「食べる権利は誰のもの？」「家族視点から見たSKTS」などのテーマについて議論をしてきましたが、今回は「そもそも誤嚥性肺炎なのか？」をテーマとしました。各テーマに関するレポートについては、新宿食支援研究会のホームページでご覧いただくことができます。

今回のテーマで議論をしている時に、私がふと感じたことがありました。それは、サービス担当者で集まり話すときに、そもそも本人の「食べること」「栄養について」どうするかを議論していない（ことが多い）のではないかとということです。

みなさんもどうでしょう？

たいていサービス担当者で集まって話すことは、全体のサービス調整のことが主となっており、患者さんの食べることや栄養については、話題として出てこないことが多いです。

生きるためには食べる必要があります。患者さんの生きていくためのクオリティを考えるなら、食べることについてきちんと考えていかななくてはならないと、SKTS勉強会を通じて、改めて実感しました。

(PT・ケアマネ 堀尾 隆)

### 車いす上での不良姿勢について ③ ～不良座位の対策～

前回、不良座位の原因についてお伝えしましたが、今回は、車いすの機能を使ったり手を加えたりして、どのように改善させたら良いか、その対策について話します。

(1) 車いすの座奥行が長すぎて、お尻がすべり座りになってしまう場合、①背中にクッションを入れ、座奥行を調整することで改善できます。②足を乗せるフットサポートの高さは、太腿と座シートの上にハンカチ一枚を入れてスッと抜けるぐらいが良いと言われます。③肘掛け高さは、肘を90度に曲げた位置から2～3cm高めに肘掛けを合わせた高さが良いと言われています。

(2) 座幅が広すぎて体が横に倒れてしまう場合、①座幅の狭い車いすがなければ、背部左右に丸めたタオルを入れて対応することもあります。②円背や側弯の人に対しては背シートをマジックベルトで調整して、出張った背中部分を後ろに逃がすことができる機能の付いた車いすをお勧めします。



車いすは様々な種類、機能があります。利用者の身体の寸法、状況から、その人に合った車いすを選定・調整することで不良座位を防ぎ、誤嚥のリスクを抑え、安心して食事ができる姿勢を作ってもらいたいと考えています。（福祉用具メーカー 中村 慎吾）

## 食支援における福祉用具とは

株式会社K-WORKER

福祉用具専門相談員 田中 健一郎

次に挙げる内容で、どんな物を思い浮かべるか、想像してみてください。◆握り手が柔らかいスプーン、◆ネック部分が自由に曲げられるフォーク、◆バネのついた指の腹で支えられるお箸、◆見た目は陶器のような軽いカップ、◆柄の付いたお椀など。…どうでしょうか？何となくイメージできたり、見覚えがあったりするのではないのでしょうか。確かに、これらの食具は福祉用具カタログに掲載されており、需要もあります。しかし、実は、300ページもある福祉用具カタログでも、「食事」関連用具の掲載ページは10ページにも及ばないのです。メーカーの興味が無いのか、それとも、全く着目されていないからなのか、理由はわかりません。

福祉用具専門相談員という立場から、私なりに考えてみたのですが、「福祉用具」というものの範疇が、実は、あまりにも広いからではないのでしょうか。

例えば、何の変哲もないマグカップは、握力が弱くて、湯飲み茶碗だと持ってられない方にとっては福祉用具になり得ます。トイレマークも、トイレの場所が分からない方には福祉用具にもなります。おもちゃのマジックハンドでさえ、腰の屈められない人にとっては、立派な福祉用具になっています。

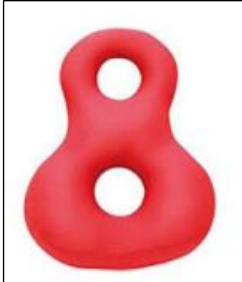
つまり、その方の生活にとって「ちょっと助けてくれる」、それがあれば「普通に」生活できるものなら、それは、福祉用具となり、その種類や品数が多くなっていくのです。

その方に適した用具を見つけたり、環境調整をするのが、福祉用具専門相談員の役割となります。

では、食支援の現場で、福祉用具専門相談員はどんなことをしているのか、一つ例を

挙げて紹介します。

Aさんは、元々、腰と膝が痛くて歩くことがとても大変でした。ご家族とは仲も良く、月に何度か、家族で外食することもあります。自宅では、なかなか上手に食事ができず、あまり食べられません。しかし、表情はいつも明るい、可愛らしいお婆様です。そのAさんに提案したことは以下の通りです。

◆外出用の車いすの肘掛けを、食卓テーブル下に入れられるタイプに変更し、外出先のレストランでスムーズに座わって食事ができるようにした。◆  
2wayの8の字クッションの上下をひっくり返し、ご自宅の食卓でも食べやすく、少しリラックスした姿勢を作った。◆

淡色テーブルに対し、濃色のランチョンマットを用意し、周りと同化してしまうことによる目の疲労を軽減した。◆腕の置き場に小型クッションを入れ、腕を安定させることで食事動作の負担を軽減した(テーブルに肘を置けば安定はするが、『行儀が悪い』という意識も強いため…)。◆バネ付きの箸から、やや短めで軽いスプーンに変更し、お箸で頑張り過ぎて疲れることのないようにした。

最後に挙げたスプーンは、いわゆる「食具」と言われるものですが、その他の物はその範疇には入りません。しかし、食支援という視点で、食事環境を整えるにあたって、どれも必要な物でした。

食事は、生きていくのに欠かせません。その方のできることや強みの部分を生かし、阻害する要因を解消していく事が大切です。

福祉用具専門相談員は、環境を整え、食支援する働きを担っています。福祉用具は、福祉用具カタログに掲載されているものだけでなく、その方に合った福祉用具を作り出していくことができる職種なのです。